

研究主題 居心地のよい教育相談の場をめざして

要約：本研究は、『居心地のよい教育相談の場』をめざし、2つの柱を立て考察した。研究1は、筆者が初めて『素の自分』をさらけ出して関わることとなったある児童との事例研究である。研究2は、金沢大学附属高校での聞きとりをもとに、勤務校での現状と取り組みについて考察した。その結果、『居心地のよい教育相談の場』は、教育相談体制を単にシステムとして整備するだけではなく、その場に関わる一人ひとりが本音を出し合い、それを受けとめようとする気持ちをもつことが大切であることが明らかになった。そのためには、時間をかけ、人格と人格の深い関わりの中で成熟した対人関係を作っていく必要がある。

キーワード：居心地、教育相談の場、素の自分、援助チーム、対人関係

I はじめに

筆者が学校現場に関わるようになってから20年あまりになる。精神疾患による病気休業者が増加の一途をたどっている今、時間的にも精神的にもゆとりがない現状が生じている。

そこで、筆者は、子どもも教師も支えられる教育相談体制作りを研究したいと思った。多忙な現場でも『教育相談の場』がしっかりと機能していれば、子どもたちの問題について考える場が確保される。また、教師にとっても、『技術』を身につけるだけでなく、『明日からまた頑張っていこう』という力が出る場になる。筆者は、そんな場の条件として『居心地のよさ』を挙げたいと考えた。そして、『居心地のよさ』の定義を『素の自分が出せ、それを受け入れてもらえる安心できる場』とした。

この研究は、2つの柱をたて考察した。研究1では、初めて『素の自分』をさらけ出して関わることとなった、ある児童との事例を詳しく述べた。今では『居心地のよい』関係となったこの児童との足跡をたどることは、この研究で重要と考えたからである。研究2では、『居心地』をキーワードとした教育相談体制づくりについて検討した。

今の現場には、子どもだけが元気になるのではなく教師も元気になれる教育相談体制が必要である。そのことを踏まえて、本研究を行った。

II 自分と向き合うきっかけとなった児童との関わり（研究1）

1. プロフィール

(1) 教師のプロフィール

(年齢・性) 42歳・女性
(教師歴)

27歳で採用。自分をさらけ出すこと、人から自分の弱い部分を指摘されることには消極的であった。Aは、初めて筆者から関わることを望んだ『しんどい子』だった。

(2) 児童のプロフィール

(学年・性) 小学6年生・女子

(臨床像) 他者からの言葉をまっすぐに受け取り、感情のまま暴れる。興奮すると、ネコのように引っかいたり噛んだりする。学習については、落ち着いて取り組めるが、発表や返事は指名しても一切しない。

(家族) 母親・弟・妹

(生活歴) 4年生7月転入。ネコのような行動をする。5年生2学期よりトラブルが減った。

(3) 学校のプロフィール

大規模校。児童は明るく活発だが問題も数多く抱えていた。教育相談体制としては機能的に動いていなかった。精神疾患で休職する教師もいた。

2. 事例の経過

I期：新しい環境の中で不安になる

Aは友だちを殴ったり、席替えで暴れたりするなど新しい環境への戸惑いを見せる。筆者は、Aの話を聴くことを大事にした。

Ⅱ期：周りに支えられながら一つ一つ乗り越える運動会の組体操。失敗してもやり遂げる。Aが何かを一つ乗り越えた瞬間のように思えた。友だちとのすれ違いで殴ろうとする。抱きしめて止めると右腕を噛まれる。傷を見せながら「Aの気持ちは全部ここで受け取ったし、絶対殴ったらいかん。」と話す。

Ⅲ期：友達や担任との関わり合いの中で

自分なりの卒業を迎える

卒業式練習に参加できない。放課後、筆者と練習をする。子どもたちのAに対する理解が必要だと思い、Aの気持ちを話し頭を下げる。周囲がAに温くなる。卒業式はみんなと一緒に参加。卒業証書は取りに出なかったが、スッキリした顔で卒業していった。

Ⅳ期：高校受験に向けて再び出会う（中3）

1月より、中学校の依頼があり、週に1回Aの受験対策に出かけた。『最後まで一緒に頑張る』ことを話し、面接の練習をするが1度も話さなかった。高校は合格。本番では面接で話す。

3. 考察

（1）教師の性格的特徴

筆者は『自律性の葛藤』を抱えている。周囲に迷惑をかけたくなくて助けを求められなかった。そして、自分で抱え込み、『自信』をなくした。

（2）児童の性格的特徴

Aは『基本的信頼感の葛藤』を抱えている。そのため不信という気持ちが生じていた。人の言動をまっすぐに受け取り、裏切られたという思いを持つと激しく攻撃した。

（3）人格と人格の関わりから

筆者とAは、それぞれに『葛藤』を抱えていた。無意識に他者への依存を抑えてきた筆者は、感情を他者に対してストレートにぶつけてくるAに自分に無い部分を見つけ惹かれていた。そして、Aと1対1で同じ土俵に立って向かい合っていくうちに、必死の依存を求めてくるAが、これまで出せなかった筆者の『素の自分』を引き出していた。これまでの筆者では、Aと関わることができ

なかった。筆者の中のすべてを見せてぶつかってきたAには、安心感さえもてるようになった。一方で、周りの教師に対して筆者は『素の自分』を出すことはできなかった。協調性が必要とされる学校現場では、都合のいい面ばかりを周囲に見せてきた。

筆者が求める『居心地のいい場』とは『素の自分が出せる場』である。しかし、それは、単に仲が良いだけでは表面上のものになってしまう。どんな状態の時の自分を出しても、つまり『素の自分』を出しても、排除されることなく受け入れられる場こそ、真の『居心地のいい場』と言える。そして、それは人格と人格の深い関わりの中でしか生まれえない。ぶつかり合っても、時間がかかっても、お互いを理解しようという気持ちを大事にする中で作り上げられていくものである。

筆者のAとの関係づくりは『教育相談体制づくり』にも十分に生かせる経験であると確信している。

Ⅲ 居心地のよい教育相談の場を作るために（研究2）

1. 金沢大学附属高校の取り組み

（1）体制ができるまで

体制ができる以前は、教師がとった方策の問題点を指摘され、自信をなくしたり精神的に追い詰められたりする教師もいた。6年前、教育相談担当である盛養護教諭が中心となり『援助チーム方式』が導入された。

（2）教育相談体制の流れ

金沢大学附属高校の教育相談は『援助チーム』という体制をとっている。これは、担任・保護者・SC・養護教諭、そして時にはその生徒に関わっている先生でチームを組み、『一緒にこの子を支えていきましょう』という姿勢で取り組む体制である。『援助チーム』では、教育相談担当（養護教諭）やSCが非常に大きな役割を担っている。

金沢大学附属高校の教育相談体制は、参加者全員がそれぞれの立場で話し合い、その生徒についての理解と方針を共有する場となっている。

（3）教育相談体制の特徴

『援助チーム』での教育相談の場は、参加する

者にとって『居心地のいい場』である。そこには、2つの要素がある。

第1に、教育相談の窓口となる養護教諭の人格的度量である。常に「問題を一人で抱え込まないで。自分を出して。」と発信し、まずは受けとめ、よりよい関係を作っている。

第2に、SCの存在である。教育相談の場は、生徒の心を理解し方針を立てる場だと常に示してくれる。『誰も責められない』という安心感が『それぞれが自分の立場で、その良さを活かして、自分を出すことができる場』を作っている。

2. 勤務校の教育相談体制

(1) 現状

3年前から加配として特別支援コーディネーターが配置された。特別支援コーディネーターは、担当が相談しやすい状態を作ること、日頃から児童理解に努めることを常に心がけている。

今年度からSCが配置され、限られた時間の中、精力的に活動している。

(2) 課題

- ① 担任との情報交換の方法
- ② SC等との連携
- ③ 保護者との連携

(3) 勤務校での取り組み

① 校内特別支援コーディネーターとして

校内特別支援コーディネーターとして、児童の様子で気づいたことを特別支援コーディネーターに報告・相談し、支援が必要な時はすぐに動ける体制をとることにした。先に挙げた3つの課題については、次のように取り組んだ。

1) 担任と教育相談担当との情報交換の方法

日常的に教育相談担当が担任と話す時間を設けてきた。短時間でも、直接話し合うことが一番の情報交換だということを感じた。

2) SCとの連携

お互いが職場の仲間として声を掛け合い、つながっていこうという意識のもとで連携が取れるようになった。

3) 保護者との連携

『一緒にこの子を支援いきましょう』という立場で、保護者とのつながりを切らないことを第1に連携してきた。

② 校内研修会の企画・運営

1) エンカウンター研修

エンカウターの利用推進と教師の自己開示の場を作ること、SCとの関係づくりをめあてとした。また、3つの葛藤から子どもの心の問題を理解するために参加者にレクチャーを行った。

2) 発達障害についての研修会

まずは目の前にいる子どもへの理解を最優先にすることと二次障害にも注意深く目を向け、子どもを支えていく必要があること、また、保護者の思いをよく理解していくことを中心に話した。

3) 教育支援委員会での活動

教育支援委員会を活性化させるために、はっきりとした方針を打ち出すことと、関係する教師の役割分担を明確にすることに気がつけた。

3. 考察

(1) コーディネーターの役割

コーディネーターに必要なリーダー性として“役職”“人格的成熟”“専門性”がある。

筆者が『教育支援会議』の必要性を求めた際、与えられた“役職”が筆者の行動を後押しした。また、毎回の『教育支援会議』が自分の葛藤と向き合う場であり、そこでもまれることが“人格的成熟”につながっている。最後に“専門性”については、経験や研修の積み重ねで得るところが大きい。特に、コーディネーターは教師という子どもたちにとって身近な存在で“専門性”を身につけることができる。その利点を生かしていきたい。

コーディネーターはそのリーダー性を発揮して、学校現場で常にアンテナを張り巡らせていくことが大事である。そして、日常的会話の中で、担任の思いを聴きながらきめ細かく動くことが大切である。「問題を一人で抱え込まないで。自分を出して。」という呼びかけが、『居心地のよい教育相談の場』を作るためのコーディネーターとしての第一歩だと筆者は考える。

(2) さらなる取り組み

① 明確な役割分担の提案

『援助チーム』が機能的に動くには、コーディネーターがその状況を的確に判断し、それぞれの専門性を活かした明確な役割分担を提案する必要がある。

②全職員への援助チームの

取り組み内容の説明

チームで動くことの利点を理解してもらい、ニーズがあったときはすぐに動けることを伝える意味で大事なことである。

③教育相談活動の広がり

教育相談の活動や担当教師のことを児童や保護者に伝える機会を持つ。さらに教室に入り児童の様子を観察するだけでなく、児童の話を聴く時間を設ける。また、理論を活用した心の理解の深め方を一つの方法として現場に紹介する。

(3)居心地のよい教育相談の場をつくるには

教育支援会議が定期的にかかれ方針が決定しても、『教育相談の場』で誰も本音を出さず、当たり障りのない言葉を並べていては、真の援助にはなりえない。援助とは、お互いの人格の関わりあいの中で生じるものである。

つまり、『居心地のよさ』とは、教育相談体制を単にシステムとして整備することではなく、そこに関わる人とのつながりを深めていくことで生まれるということである。お互いを理解しようとする気持ちを持ち続けることが大切である。

IV 総合的考察

本研究の目的は、多忙化する学校現場の中で、誰にとっても『居心地のよい教育相談の場』を作るためには、何が必要なかを考察することであった。しかし、お互いの人格と人格の関わりあいを深めなければ『居心地のよさ』は生まれず、それを阻むものは多忙化だけではないことが分かった。

1. 子どもとの居心地のよい関わり

子どもと『居心地のよい』関係を作るときには、一人の人間として、『素の自分』で関係を作っていかなければならない。教育相談において、子どもに真の援助をするときはその行動だけにとらわれず、心の動きを理解する必要がある。そのためには、教師自らがありのままの自

分を出し、子どもの話を聴いたり、行動を受けとめたりしなければならない。そして、本当の自分を受け入れてくれる存在として子どもに認めてもらえたとき、真の援助が可能になると考える。

2. 同僚教師との居心地のよい関わり

教育相談の場では、児童についての支援を考えるだけでなく、その児童に関わる教師を支える場面が存在する。そこでも、真の援助をするためにはお互いが相手の中に入り理解しようとする気持ちと、相手が出した『素の自分』を受け入れる気持ちをもち続けなければならない。協調性が必要とされる学校現場では、本音での関わりを避けてしまう時がある。しかし、声をかけあい、つながりを求め、関わりを深めていくことでしか、本当に『居心地のよい』関係は生まれえない。

3. まとめと今後の展望

『居心地のよい』関係を作るためには、時間をかけ、本音を出し合いそれを受けとめようとする気持ちが最も大切である。教育相談の場が、教師や保護者を援助し、子どもを支えていく場であるならば、その場にいる誰もがその気持ちを持ち続けることが『居心地のよい教育相談の場』をつくる前提になる。以前の筆者は、教育相談体制を機能的に整えれば、子どもも教師も支えられる話し合いの場がもてると思っていた。また、コーディネーターの力量で充実した教育相談体制がつくっていかれるとも思っていた。もちろん、これらのことも教育相談を充実させるためには必要なことだ。しかし、研究を進めていく中で、大事なことは一人ひとりの内面であり、人格と人格との深い関わりであることが明らかになった。理想的な教育相談の形は、成熟した対人関係のもとで成立するのである。

今後は、学校現場に関わる多くの人と『居心地のよい場』をつくっていききたい。そのためには、筆者自らが人格的度量をつけ、『素の自分』で、未熟な部分も見せながら周囲に働きかけなければならないと強く感じている。